

# 旭労災病院ニュース

病院情報誌

第 130 号

平成 28 年 9 月 1 日発行

発行所：旭労災病院

〒4888535

尾瀬田町平子町北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

<http://www.asahih.rofuku.go.jp/>

## 労災疾病医学研究—じん肺ハンドブック(仮題)作成中

呼吸器科部長 太田 千晴



独立行政法人労働者健康安全機構は、労災疾病等医学研究を行っており、当科も他の労災病院と共同で、じん肺、アスベストに関する調査・研究に取り組んでいます。その中でも、当院が主体となって取り組んでいるのが、「じん肺ハンドブック作成に関する研究・開発」です。

我が国ではじん肺の有所見者数は年々減少しているものの、粉じん作業に従事する労働者数はここ数年増加傾向となっており、多くの先生方がじん肺健診に関与されています。じん肺の診断に関しては、H22年に肺機能検査異常の判定基準が日本人のデーターを元に改訂されたり、H23年にじん肺標準エックス線写真集電子媒体版が公表されたりと、認定基準がいくつか変更されています。そのため、これらの変更点を網羅しつつ、じん肺の健診・診断をする際の how to 本になるものを目指して、作成に取り組んでいます。現在は原稿が一通り集まり、より理解しやすい冊子にするため、重複部分を調整したり、実臨床に即した内容に修正したり、という作業を行っており、今年度中の発刊・普及活動を目指しています。

じん肺と診断されるには、一定の粉じん作業歴があり、かつ胸部エックス線でじん肺標準エックス線写真の 1 型以上の所見があることが必要です。その上で、胸部臨床検査、肺機能検査、合併症（肺結核、結核性胸膜炎、続発性気管支炎、続発性気管支拡張症、続発性気胸、原発性肺がん）に関する検査を行い、合併症の有無、及びじん肺管理区分を判定します。じん肺管理区分が管理 4（胸部エックス線写真の像が 4C（じん肺による大陰影を認め、大きさが一側肺野の 1/3 を超えるもの）または胸部エックス線でじん肺所見があり、かつじん肺による著しい肺機能障害を伴うもの）と決定されたもの、及び合併症にかかっていると認められるものは療養の対象となり、労働者として雇用されている（いた）、または労災保険の特別加入者である場合は、労災補償の対象となります。

東海地方は瀬戸、多治見、常滑など陶器の生産地が多く、日常診療でじん肺の方に接する機会もあると思われます。窯業は中小企業や家内産業で営まれていることも多く、じん肺の所見が存在しても、きちんと診断や経過観察されていない方もみえます。粉じんの職歴があり、胸部エックス線検査で異常陰影を認める方、呼吸器症状を認める方がありましたら、一度御紹介して頂ければ幸いです。

# 子宮頸がんワクチンの行方

産婦人科部長 宮田 敬三



2016年7月19日、米国癌協会(ACS)はヒトパピローマウイルス(以下HPV)ワクチンに関するガイドラインを改定しました。以下のとおりです。(※1、英文)

- ・男女とも11-12歳でHPVワクチンを開始、9歳からでも可能。
- ・13-26歳の女性や13-21歳の男性で、3回の接種を受けていない場合は、接種を推奨。
- ・22-26歳の男性の接種を考慮する。(今回の改定で追加された。)
- ・26歳までの免疫不全(HIV感染含む)の男女への接種推奨。
- ・26歳までの男性間性交経験者への接種推奨。

世界で(WHO加盟国中65カ国で接種推奨)このワクチンの確固たる有効性が示されるにしたがい、4月18日に日本産婦人科学会や日本小児科学会など17団体が本ワクチンの積極的な接種を推奨しました。この中では2007年来、接種を受けた群で子宮頸がんの前癌病変の発生が50%減少したこと、自己免疫疾患(線維筋痛症、慢性疼痛など)や複合性局所疼痛症候群(CRPS)や体位性起立性頻拍症候群(POTS)の発症率は、接種を受けた群と受けなかった群で差が認められることなどが、参考文献として示されています。

(※2)

そして、7月4日弁護士らで作る市民団体が、積極的な接種推奨を再開すべきではないとする意見書を発表しました。さらに7月27日にはHPVワクチンの接種によって深刻な副反応被害を受けたと訴える原告が、国および製薬会社に対して、損害賠償請求訴訟をおこしました。(※3)この訴訟では、世界で科学的に立証されつつあるHPVワクチンの安全性に対し、HPVワクチンと「健康被害」の関係性が世界的に立証されなければなりません。

またHPVワクチン接種の有無にかかわらず当該の疾病(線維筋痛症、CRPS、POTSなど)は発症することから、包括的に救済する仕組みも必要と思われます。

子宮頸がん検診の受診率が極めて低い日本にあって、若年の子宮頸がん患者が確実に増加しており、このような状況下で亡くなっていく方も増加しています。未来にわたっての福音を無にしかねない行動は慎重でなければなりません。



## 医師異動のお知らせ

新任医師

麻酔科部長

いとう たつし  
伊藤 立志

(平成2年藤田保健衛生大学卒)

平成28年9月1日付